

第27回ソウル大学校－北海道大学ジョイントシンポジウムを開催

本学の戦略的国際連携先である韓国ソウル大学校（以下、SNU）との第27回ジョイントシンポジウムが、11月27日（水）、28日（木）の2日間、SNU冠岳キャンパスで開催されました。

SNUと本学によるジョイントシンポジウムは、初回開催の平成10年以来、毎年札幌とソウルで交互に開催しており、今年で27回目を迎えることができました。

本学からは高橋 彩理事・副学長をはじめ約50名の研究者及び学生がSNUを訪問し、SNUからは約60名の研究者及び学生が結集しました。11月27日（水）の午後から夜にかけて開催された同シンポジウムの全体会及びレセプションは、ソウル現地で11月としては観測史上最大の積雪に見舞われることとなりました。航空機の遅延、同校敷地内での交通規制などが行われ、複数の研究分科会メンバーが全体会に参加できない事態が発生したものの、分科会については無事に開催することがで

きました。

全体会では、SNU工学部及び同校未来戦略研究所のジェヨン・ユン教授が、シンポジウムのテーマ「持続可能な環境に向けた学際研究の推進（Promoting Transdisciplinary Research Towards Sustainable Environment）」に関連し、「気候危機の克服とカーボンニュートラルの達成における大学の役割」について基調講演を行い、地球規模課題である気候危機を克服するためには、カーボンニュートラル（Carbon Neutrality）の達成を目指す必要ならず、大学は、カーボンニュートラルな社会を支える技術と学術の基盤を構築する責任があり、大学同士の協力的な取組がこれまで以上に重要である旨が述べられました。

同シンポジウムに付随して開催された研究分科会の研究フィールドは、「医学」「応用化学」「保健科学」「エネルギー工学」「機械工学」「材料工学」「情報学」「教育学」「環境

科学（森林学）」と多岐にわたり、持続可能な環境に向けた学際的な取組に関する意識の高いものとなりました。

また、同シンポジウムの開催中、両大学執行部が会合を持ち、本学で来年開催予定の第28回シンポジウムに係る調整を行ったほか、SNUで最先端の学際的研究が行われているAI研究所（AIIS）などを視察しました。

シンポジウムの翌週には、両校の職員を相互派遣する職員交流が開催され、本学の学務部国際交流課及び同部学生支援課から2名が、SNUの国際部国際教育及び国際協力担当から3名が参加し、互いに職場訪問を行い、学生支援、学生交流プログラムや海外大学との連携交流等に係る様々な意見交換を通じて交流を深めました。

28回目のジョイントシンポジウムは、令和7年10月下旬から11月上旬にかけて本学で開催予定です。

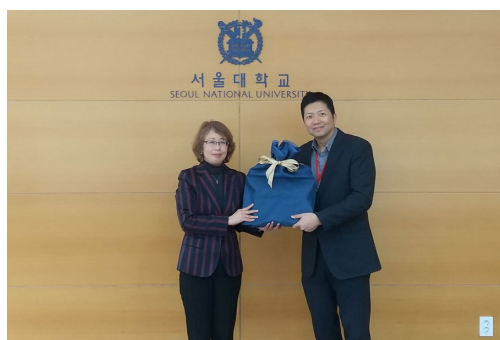
（国際連携推進本部）



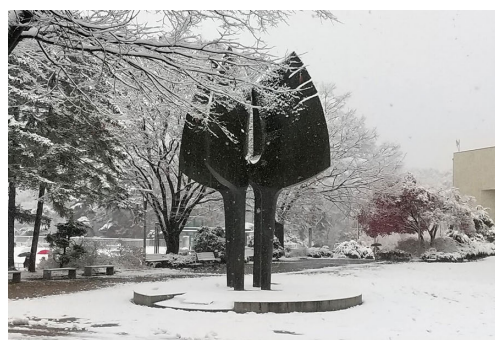
全体会で祝辞を述べる高橋理事・副学長



両大学執行部会合



高橋理事・副学長（左）とSNUのジェイ・ワ・リー副学長（右）



11月としては記録的な大雪に見舞われたSNUキャンパス（写真はキャンパス内の象徴的な造形物でもある2匹の鶴が翼を広げた姿を模したオブジェ）

分科会1

SNU-HU Joint Young Researchers' Symposium: Crossroads of Chemistry and Engineering for Sustainability

SNU-HU 若手研究者シンポジウム～持続可能性を目指して化学と工学の学際的連携～／工学研究院 准教授 荻野 勲

工学研究院応用化学部門から、菊地隆司教授、荻野 勲准教授、真栄城正寿准教授、山本拓矢准教授、永石新太郎助教、百合野大雅助教が研究分科会「若手研究者シンポジウム～持続可能性を目指して化学と工学の学際的連携～」に参加し、SNUの教員と意見交換を行いました。

今回は、両大学の若手研究者間の学術交流を促進することを目的とし、両大学の若手研究者が学際的研究に直接関与することで、当該分野において多角的な視点を保持し、持続的な交流を行うための基盤を構築することを目指したものとなりました。

学際的研究を促進するため、本分科

会セッションでは、化学及び化学工学における様々な分野の若手研究者による発表が行われました。両大学から、それぞれ4人の講演者が登壇し、全体で8件の発表が行われました。

(工学研究院)



約100年ぶりの大雪に見舞われたSNU内での分科会参加者集合写真

分科会2

High Temperature Nuclear Reactors for a Cool Earth

地球を冷やしてくれる高温ガス炉／工学研究院 助教 張 承賢

「地球を冷やしてくれる高温ガス炉」研究分科会セッションでは、高温ガス冷却炉（以下、HTGR）に焦点が当てられました。HTGRは、産業の脱炭素化とエネルギー安全保障の強化に向けて不可欠なものです。同分科会セッションでは、SNUと本学の若手研究者が、HTGRを含めた先進的な原子力

技術に関する研究を共有する場となりました。

同分科会セッションは11月28日（木）に行われ、翌日には、今後の研究協働の可能性について議論が交わされ、研究論文の共著、国際共同研究公募への応募、オンラインを含むワークショップの開催等について意見交換が行われ

ました。

日本と韓国はどちらもHTGR技術に強い関心を示しており、同分科会セッションは両大学間の学術研究協力を強化し、将来的な研究イニシアチブを促進することに貢献しました。

(工学研究院)



分科会参加者の集合写真

分科会3

The Potential of AI-Enhanced MRI and Nuclear Medicine: Contributions to Sustainability and the Environment

AIで進化するMRIと核医学の可能性：持続可能性と環境への貢献／医学研究院 教授 工藤與亮

27日（水）の全体セッションは、残念ながらソウル市内の記録的な大雪により中止となりましたが、28日（木）には、医学研究院画像診断学教室はSNU医学部放射線科のス・ホン・チェ教授と共同で、MRIと核医学を軸とした研究分科会を開催しました。

今回のシンポジウムにより、SNUと本学の研究者の信頼関係を深めることができました。本教室は今後も、このシンポジウムへ継続的に参加していく予定です。令和7年にはこのシンポジウムは札幌で開催される予定であり、SNUの研究者を迎えて実りあるイベントが開催できるよう準備したいと考えています。

多くの参加者の皆様に感謝申し上げますとともに、次回のシンポジウムを楽しみにしています。

（医学研究院）



分科会参加者の集合写真

分科会4

Environmental Chemicals and Human Health

環境化学物質と人々の健康／環境健康科学研究教育センター 特任准教授 アイツバマイゆふ

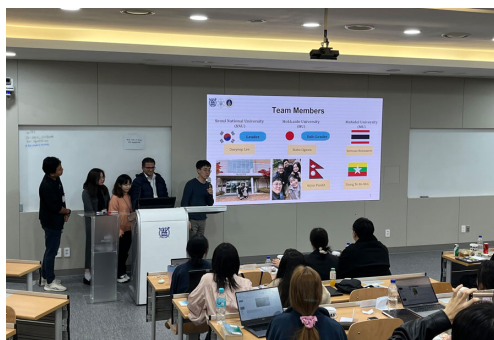
本分科会には、本学、SNU、及びタイのマヒドン大学に所属する教員8名、及び大学院生23名、学部生1名が参加しました。分科会の中で開催したSNUとの共同講義は、今回で9回目となります。環境と健康分野に関する基礎知識に加えて、最近の環境問題やその対策についても含め、幅広い知識を参加学生に習得させることができました。

また、環境保健、環境疫学の専門以外の視点を持つ質問や意見も出され、学生同士の異分野交流も深めることができました。共同講義では、担当教員及び学生同士の意見交換、共同発表のための資料作成及びプレゼンテーションが実施されました。参加者からのプレゼンテーションでは、今後の課題も提起されており、非常にクオリティが高いものでした。

さらに、フィールドワークでは、ソウル市のエネルギー・ドリーム・センターを訪問し、将来の環境保護に不可欠な、エネルギー効率の高い持続可能な建物に関することなどについて視察しました。エネルギー・ドリーム・センターの職員からは専門的な説明があり、学生と職員の間で活発な意見交換が実施されました。

共同講義を通じて本学の大学院生間のみならず、SNU及びマヒドン大学の大学院生との交流による将来のネットワークの形成にもつながり、参加者の今後のキャリア形成においても有益になることが期待されます。

（環境健康科学研究教育センター）



グループワークプレゼンテーションの様子

分科会5

Reshaping Roles and Skills of Educational Practitioners: Rethinking 「教」 for the Future Generation and a Sustainable Society

教育専門職の役割とスキルに関する再構築：未来世代と持続可能な社会のための「教」に関する再考／高等教育推進機構 教授 江本理恵、助教 鄭 漢模、助教 田中孝平

SNU未来教育革新センター（代表：同センター長 イム・チョルイル教授）、本学高等教育推進機構高等教育研究部、大学院教育推進機構高等教育研修センター、産学・地域協働推進機構（代表：高等教育研究部 江本理恵教授）は、11月28日（木）にジョイントシンポジウム分科会を開催し、SNU側18名、本学側9名が参加しました。

両大学から各々6件の発表があり、教育現場におけるAIの利活用、アントレプレナーシップ教育、ファカルティ・ディベロップメント、教師へのサポートシステム等々、それぞれの教育実践に基づいた発表が行われました。当日の発表リストは、高等教育研究部のウェブサイトにてご参照いただけます。本分科会の成果として、両大学が抱える教育的課題に関して共通点を見出すことができたことがあげられます。両大学の参加者は、急変する両国の社会において、特に教育専門職の役

割や、教育専門職に対する社会からの期待もまた大きく変化していることに共感しました。このことを受け、今後ジョイントシンポジウムのような形を含め、学術的な交流を続けていくことを検討していく所存です。

本分科会が開催された日は、韓国の初雪としては117年ぶりの大雪で、本来予定していた会場までのアクセスができなくなりました。しかしホスト側のイム教授をはじめ、スタッフの皆様のおかげで、直前にアクセス可能な会

場に変更することができ、無事開催することができました。本分科会が無事開催できたこと、そして、両大学の研究者が集まり非常に有益な議論ができたことをとても嬉しく思います。参加してくださった皆様に感謝を申し上げますとともに、共通する教育的課題を抱える両大学が今後も交流を続けていけることを心から願っております。

（高等教育推進機構）



分科会参加者の集合写真

分科会6

Forests as a Nature-based Solutions for sustainable environments

持続可能な環境を目指した自然に基づく解決策（NbS）としての森林の役割／北方生物圏フィールド科学センター 准教授 植竹 淳

本分科会のセッションテーマは、東アジアを代表する2つの学術機関であるSNUと本学の研究者と学生が、自然ベースのソリューションを効果的に導入することで、自然が提供する恩恵を最大化し、環境、社会、経済の問題を効果的に解決していくことを目指すものです。同分科会セッションでは、森林管理と動物、微生物を含む生物多様性の保全、生態系サービスを利用した水処理技術など、様々な分野の研究を共有し、持続可能な人間社会と環境のためにどのような学際的なアプローチが妥当であるか議論を行いました。

同分科会セッションでは、両国で持続可能な環境を実現するために、森林科学における地域協力を強化するため

の最新の情報、研究成果などが共有できました。

また、学生交流に関する議論も行われ、令和7年6月にSNUのNambu University Forestに本学の学生が、同年9月頃には本学の研究林にSNUの学

生がそれぞれ訪問する方針で調整が行われ、同交流の目的は、学術的な交流の基盤を築くことであると相互に確認できました。

（北方生物圏フィールド科学センター）



ワークショップの様子

分科会7

Development of construction materials for carbon neutrality and sustainability

カーボンニュートラルと持続可能性のための建設資材の開発に関するシンポジウム／工学研究院 准教授 胡桃澤清文

11月27日（水）にSNUにおいて、第27回SNU－北海道大学ジョイントシンポジウムの分科会として「カーボンニュートラルと持続可能性のための建設資材の開発に関するシンポジウム」を開催しました。

当日のソウルは11月としては大変珍しく大雪が降り、底冷えのする寒い1日となりました。SNU側代表者のジュヒョク・ムン教授、本学側代表者の胡

桃澤清文准教授が中心となり、教員と学生による口頭発表（SNU3件、釜山大学校1件、韓国建設技術研究院（以下、KICT）1件、本学4件）を準備し、両大学、釜山大学校及びKICTから約22名の参加者を得て盛況なシンポジウムとなりました。

建設資材のカーボンニュートラルにかかわる内容からその分析技術に関する内容に関して発表が行われ、活発な

議論が行われました。シンポジウム終了後には研究施設のラボツアーを行いました。SNUの研究施設は大変充実しており、最新の分析機器があり大変興味深いものでした。また、韓国ならではの昼食及び夕食を兼ねた懇親会を準備していただき、研究交流に加えて大いに親睦を深めることができました。

（工学研究院）



分科会参加者の集合写真

分科会8

2024 International Workshop on the New Frontiers in Convergence Science and Technology

複合科学技術の新たなフロンティア／情報科学研究院 教授 平田 拓

情報科学研究院はSNU側のカウンターパートであるGraduate School of Convergence Science and Technology（以下、GSCST）と分科会を開催しました。GSCSTは、複合領域（バイオ工学、情報科学、分子医学・薬学）を対象とする研究科です。今回は、情報科学研究院から菅原広剛准教授、宮原英之准教授、平田 拓教授の3名の教員と、情報科学院から7名の大学院生（情報エレクトロニクスコース6名、生体情報工学コース1名）が参加しました。

分科会（2024 International Workshop on New Frontiers in Convergence Science and Technology）は、11月28日（木）午後にGSCSTのコンファレンスホールで開催されました。GSCSTのハワード・リー研究科長のご挨拶で分科会がスタートし、前半ではSNUの教員3名、本学の教員3名による講演を行

い、後半には本学とSNUの大学院生17名によるポスター発表を行いました。分科会の参加者は、本学の教員、大学院生に加えてSNUの教員6名、大学院生約17名でした。両大学の大学院生がポスターの前で積極的に話をしている様子が見られました。

分科会の後、双方の教員、大学院生が交流する機会が設けられ、それぞれの大学事情や国際交流について意見交

換しました。なお、今回の分科会開催には、ビッグデータとIoTに関する協同センター（CCB）のご支援をいただきました。次回のジョイントシンポジウムは本学での開催ですので、札幌での再会を約束して分科会の全ての行事を終えました。

（情報科学研究院）



大学院生によるポスター発表の様子

分科会9

Science Education for Sustainable Development: Preparing Educators for Global Challenges

2024 HU-SNU-NTNU-KU科学教育ジョイントシンポジウム 持続的発展のための科学教育：国際的課題に備える教育者／情報基盤センター・大学院教育推進機構オープンエデュケーションセンター 教授 重田勝介

本分科会は、平成20年の第11回北海道大学-SNUジョイントシンポジウムにおける分科会「ソウル大学校と北海道大学における教員養成・研修の比較研究」から始まり、コロナ禍による中断（令和3年及び同4年）はありましたが、継続して開催してきました。様々な研究領域の大学院生と教員が4大学（本学、SNU、台湾師範大学、カセサート大学）から集い、研究成果を発表し交流するための有効な場となっています。

ます。

今年度のテーマは「持続的発展のための科学教育：国際的課題に備える教育者」です。基調講演においては、科学教育における認識論的アプローチの重要性や、アイトラッキング技術等を用いた教育手法の高度化、フィールドワークを通じたSTEM教育の提案など、多様なテーマについて情報提供がなされました。また、各大学の教員と学生による口頭発表（34件）、ポスター

発表（17件）、ワークショップ（2件）

でも活発な議論がなされました。ソウル市内の降雪のため、2日目の分科会はZoomによるオンライン開催に急遽変更されました。3日目のスタディツアーではSNU附属中学校・高校への視察が行われました。来年度の本分科会は台湾師範大学で開催する予定です。

（情報基盤センター、

大学院教育推進機構オープンエデュケーションセンター）



分科会参加者の集合写真

分科会10

HU-SNU Joint Symposium on “Bioengineering toward Next Generation”

北大-SNUジョイントシンポジウム「次世代のバイオエンジニアリングへむけて」／工学研究院 教授 東藤正浩

11月27日（水）に「次世代のバイオエンジニアリングへむけて」と題し、機械・航空宇宙工学に関する分科会を開催しました。

SNU側代表者のエミー・キョンウォン・ハン教授、本学側の代表者として工学研究院の東藤正浩教授が中心となり、教員による口頭発表（SNU4件、本学3件）及び学生による発表（SNU・口頭発表4件、本学・オンライン発表4

件）を準備しました。

当日は大雪に見舞われる1日となりましたが、オンライン参加も含め、両大学から約30名の参加者を得て盛況な分科会となりました。午前から午後にかけて、生体医工学に関する基礎研究から、実用化段階の応用研究まで幅広い研究分野の発表が行われ、参加者は活発な議論と情報交換を行い、今後の研究活動の連携についても大いに可能性

を感じることでできる会となりました。準備していただいた昼食会では、雪景色を眺めながらこれまでの分科会の思い出話なども盛り上がり、研究交流に加えて大いに親睦を深めることができました。

（工学研究院）



分科会参加者の集合写真

職員交流

令和6年度北海道大学事務職員海外短期集中研修

令和6年度北海道大学事務職員海外短期集中研修が12月2日（月）から12月6日（金）に行われました。本研修は本学の戦略的国際連携先であるSNUとの第27回ジョイントシンポジウム職員交流事業の一環として、両大学の職員がそれぞれ相手大学を訪れ、実際の現場を見学しながら、各部署の業務紹介、業務上の優れた取組や課題等を共有し、意見交換を行うものです。今年度は、SNU国際部から学生の海外派遣を担当するヒョンジュ・ペ職員、外国人留学生支援を担当するダイエ・キム職員、国際交流関係を担当するヘセ・シン職員の3名、本学からは学務部学生支援課奨学支援担当の佐藤彩乃係員と同部国際交流課派遣担当の安藤優記係員の2名が参加しました。

12月2日（月）、3日（火）は本学からの参加者がSNU冠岳キャンパスを訪れ、学生宿舍、中央図書館を見学した他、国際部で

は、SNUでの外国人留学生向けの経済支援・交流イベントや学生の海外派遣プログラム等について積極的な意見交換を行い、大きな学びを得ることができ、両大学が直面する学生派遣にかかる課題も共有することができました。また、国際関係を担当するジェイワ・リー副学長と懇談し、SNUと本学での学生派遣・受入における共通の課題やその対応策について知見を広げることができました。

続く4日（水）には、本学からの参加者とともにSNUからの参加者が本学へ移動し、5日（木）、6日（金）は、低温科学研究所、附属図書館本館、オープンイノベーションハブ「エンレイソウ」、総合博物館を見学した他、学生交流ステーション、高等教育推進機構、国際部を訪問しました。学生交流ステーション、高等教育推進機構では、本学の他の職員も交え、本学における学生派遣・受入プログラムや外国

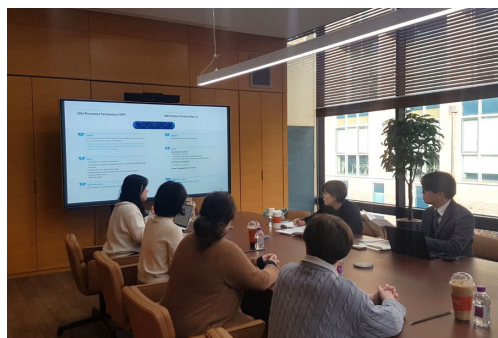
人留学生への支援全般について積極的な意見交換を行いました。国際部では、本学の国際戦略や海外からの来訪者に対するプロトコル等について幅広い情報を共有し、参加者からは、本学に国際戦略のための部署があることが印象的であり、今後のSNUの国際化について大きな示唆を受けたとの感想が寄せられました。

本研修は、両大学の参加者が事前に相手先の要望を聞き取った上で研修計画を立て、基本的に英語を用いながら5日間行動を共にします。このため、語学力向上を図ることはもちろん、業務に関連する多くの学びや気づきを得られる貴重な機会となりました。参加者からは、職員同士の交流継続を望む声も寄せられており、今後も活発な交流事業の展開が期待されます。

（国際連携推進本部、国際部国際企画課）



リー副学長（中央）との記念写真



SNU国際部での意見交換



本学高橋理事室にて



本学学務部での意見交換